

Renewal!! 今号よりニューズレターは誌面をリニューアルしました

NEWS LETTER

日本がん登録協議会理事 三上春夫先生 追悼特別号

p 01-03
三上春夫先生 追悼特集

p 04-08
学術集会開催報告

p 09-10
実務でGO/J-CIP委員会報告

p 12-13
関連学会一覧 / 学術集会案内

p 15-16
編集後記, 事務局便り / 賛助会員一覧



Haruo Mikami

—KapWeb 開発物語—

2022年3月7日、千葉県がんセンター研究所予防疫学研究部長三上春夫先生(JACR理事)がご逝去されました。三上先生は2013年1月、脳出血で倒れましたが、その後の懸命なリハビリにより左半身に麻痺は残ったものの、2015年9月に職場復帰されました。全国がんセンター協議会(全がん協)研究班、日本多施設共同コホート研究(J-MICC研究)等、研究活動に精力的に取り組み、JACRの学術集会にも車椅子で参加されていました。三上先生はJACR法人設立時の監事として、その後理事として、JACRを支えてくださいました。三上先生のがん登録や疫学研究へのご貢献に敬意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

三上先生と私の出会いは、私が2000年に厚生省がん研究助成金による全がん協の院内がん登録研究班(岡本班:2000年4月~2004年3月)に群馬県立がんセンターから研究協力者として参加したことが始まりです。三上先生は2000年6月の班会議で「生存率測定プログラムKAP(WIN版)の紹介」という報告

をなさいました。このKAP(MS-DOS版)は千葉県がんセンター研究局疫学部長の故村田紀(もとい)先生が開発し、コホート生命表を読み込んで相対生存率を算定する希少なソフトとして、疫学研究者に配布されました。その後、三上先生によりWindows対応のKAPWINとして完成し、現在はWEB上で生存率を算定してグラフ表示をするKapWebとして公開されています。キャッシュ機能を用いることにより、表示スピードも早くなりました。

岡本班の後継として、猿木班(2004年4月~2008年3月)、三上班(2008年4月~2012年3月)と続きます。2011年9月に母校の千葉大学けやき会館で、地域がん登録全国協議会第20回学術集会(三上春夫会長)が「がん登録のマイルストーン」をテーマに開催されました。➤

三上春夫先生を偲んで

猿木信裕



→新潟五島今坂温泉にて(2010年)
左から、故三上先生、岡本先生、
猿木理事長、丸山先生
(当時、新潟がんセンター麻酔科部長)



→第29次南極観測隊
(後左から二人目が故三上先生)

▽三上先生は「がん登録の行く末へ社会に向けて」と題した会長講演を行い、Webを介した罹患集計と生存率集計（KapWeb構想）のお話をなさいました。研究班として収集したこれまでのデータを社会に役立てたいという三上先生の強い思いから、やがてこの構想は実現することになります。

2012年4月からは西本班（三上小班）としての活動が続き、全がん協加盟施設の協力により収集した院内がん登録の貴重なデータは、2012年10月22日にKapWebとして初公開されました。三上先生は10月23日0時からのNHK NEWS WEB 24の生放送番組に出演し、KapWebの開発にかけた思いを語っています。その3ヶ月後、三上先生は病に倒れてしまいましたが、千葉県がんセンター研究所の皆様の大きなサポートもあり、KapWebに英語版やアンケート機能を追加し、サバイバー生存率や10年生存率を算定するまでに育てあげました。

国立がん研究センターでの班会議が終わると、三上先生と私は帰りに築地のお寿司屋さんに寄ることもありました。三上先生は第29次南極地域観測隊の越冬隊に医師として参加し、貴重な経験をされました。帰国

▽後は南極地域観測隊OB会にも積極的に参加するなど、仲間との繋がりを大事にする人でした。少量のビールを飲み、お寿司を食べながら、南極の思い出話、がん登録や疫学研究への思い、KAPWINやKapWebの開発への思いを熱く語ってくれました。KapWebの将来について夢を語りながら、少し涙ぐむ時もありました。おそらく我が子のようなKapWebの実現が嬉しかったのではないかと思います。

残念ながら三上先生はお亡くなりになりましたが、KapWebという財産を残してくれました。私たちは三上先生の意志を引き継ぎ、これからもがん登録や疫学研究の発展に努力していきたいと思ひます。三上先生、長い間お疲れ様でした。ゆっくりお休みください。

猿木 信裕

Nobuhiro Saruki

群馬県衛生環境研究所所長
日本がん登録協議会理事長



故三上先生を偲ぶ

本年（2022年）の3月に本協議会の理事であり千葉県がんセンターの予防疫学研究部長で在られた三上春夫先生がご逝去されました。コロナ禍であったことから葬儀は家族葬で行われ、友人、知人のお別れが出来ませんでした。そのため有志と図りまして、7月17日に千葉の地で「偲ぶ会」を開催し、永遠の別れをいたしましたところでした。

三上先生と最初にお会いしたのは、1997年千葉市にて千葉県がんセンター疫学研究部長で在られた村田紀先生（故人）が主催された第7回地域がん登録全国協議会学術集会（主題：がん登録とコンピュータ）でした。会場の設置や運営、パソコンのハンドリングなど多彩な能力を発揮されていました。それ以前には第29次の南極観測隊に医師として参加され、帰国後には千葉県救急医療センターでお仕事をされていました。学術集会の翌年、千葉県がんセンター疫学部の村田先生のもとに職場を移され、がんの疫学研究とがん登録の実務と研究へ従事されることになりました。がん登録に関する三上先生のご業績は猿木理事長から報告がなされると思ひますし、がんのコホート研究に関しては田中前理事長からご報告がなされると思ひます。

私からはそれ以外の三上先生の研究への指向について少しだけお話して、追悼文とさせていただきます。実は故村田紀先生の追悼文も寄稿（JACR、NEWSLETTER No.19）させていただき、二代に亘ってのお見送りとなってしまいました。合掌。

三上先生のご出身は北津軽郡板柳町で、弘前高校から千葉大の医学部へ進学されています。大学同期の先生

▽に伺いますと3月の早生まれで、同級生の中で最も若かったそうです。卒業後は公衆衛生学の大学院に進まれ、へき地医療や極地医療に興味を持たれ、第29次の南極観測隊へ参加することになられたようです。千葉県がんセンターの上司で有られた故村田先生は「環境とがん」がご専門で、その影響もあってか「環境汚染とがん」についての研究に並々ならぬ意識を注いでおられました。その成果は「交通量と肺がん」の研究に代表されると思ひます。この研究は肺がん罹患者と死亡者の居住地を丹念に地図上にプロットし、最も交通量の多い幹線道路からの距離による大気汚染濃度と肺がん罹患のリスクを算出した研究です。この成果は日本がん登録協議会（JACR）のホームページの「がん登録が役立った例」に掲載されていますのでご覧ください。三上先生は、この研究を開始されたころからがん対策における「がん登録」データの重要性を深く認識され、がん登録の精度向上や法制化へ向けた活動にもご尽力されました。私は神奈川県立がんセンターにおいて「がん予防の研究」や「地域がん登録の運用と活用に関する研究」に従事していたことから、千葉県がん登録と同じ悩みや限界を感じておりました。それは、千葉都民、神奈川県と称されるように巨大な経済圏である東京に生活や医療などを依存している県民の方々が多数おられ、両県の地域がん登録では東京の医療機関にがん罹患の届け出依頼が困難で、がん罹患により死亡された方のみを死亡票から把握することしか出来ないという共通した事情でした（当時、東京、埼玉、茨城、山梨には地域がん